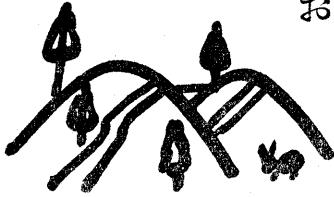


保育の工夫

お山づくり



長谷幸枝

九月二十六日 木曜日 晴。研究保育の日でした。この日の共同製作「お山づくり」について書いてみたいと思います。

私の扱った幼児は付属幼稚園五歳児の組（男子十八、女子十七）であり、幼稚園の最年長組です。幼稚園生活も二年あるいは三年目であり、経験内容も多く、友だちどうしの結びつきも円滑に思われまわりました。したがって要求内容も相当に高く、クラスの村石先生からも御注意があったように、私の計画についても子どもたちの要求を満足させるもの、あまり簡易すぎないで子どもたちが一生懸命工夫するようなもの、更に子どもたちが自分の考えを生かして楽しめるようなものでなければならぬと思いました。一日の重点として何をするか、研究保育でありますから、はっきりとしたものの方がよいと考え、製作にしようと思われました。

製作に「お山づくり」を取りあげた動機としては、夏休みがすんだばかりであり、こ

のクラスではこんなことをやっていたのです。夏休みの話合い、つまり休み中自分の一番楽しかったことをひとりずつ前に出て友だちに話してあげる。休み中で一番楽しかったことを絵に書いてみる。こんなようすを見ていると、海で遊んだこと、山に登ったこと、いなかへ行ったことなどが一番楽しく印象に残ったことのように思われまわりました。その後村石先生の御指導によってとてもすばらしい海の共同製作ができました。

ラシャ紙二枚に絵の具で波、砂浜を書きそこに思い思いの魚・船・人・貝などを書いたものを切りぬいてはりつけたものでした。見ていると楽しくなるような海で子どもたちが喜んでやったようすが目に見えるようでした。山を楽しんだ人は海を楽しんだ人より少ないようでしたが、山に登った人の印象も表現させてあげたい。山に登った時のあの気持の良さ、そんな山の楽しさも子どもたちに知らせたい。こんなことから、今度山をやってみようと思えるようになって

たのです。子どもたちが語った山、書いた山は箱根・富士山などでした。これで山をつくろうということに決めましたが、山は山でもどんな山にしようか。これについてはなかなか満足はいく考えが浮びませんでした。大きな紙にみんなで山を書き、そこに好きなものを書いてはるといふことは、一番先に考えられましたが、この方法はやりそうもない。そこで次に考えたのは、山にはるものを立体的にしたらということでした。例えば、蟬でも、書いたものをはるのではなく、胴もつけて立体的にし、それをはりつけたら少しは面白が出るのではないかと思いました。ただしこれでもやはり変化が少なく、もっと良い方法があると思われました。そして実際に山を作ってみようと思っただけです。本当の山のように作れたら、子どもたちもきつと喜んでくれると思います。自信ありませんでしたが、とにかく山を作ってみようと思い、一応こ

んなふうには計画をたてました。高さの異なる山を二つ作っておく。そこに子どもたちが絵具で色をぬり、木を植えたり、動物をはなしたり、池を作ったり子どもたちの好きな山をつくりあげていく、山について考えていることを表現できるようにしよう。

そこで準備にかかりました。

・ボール紙二枚(縦65cm横78cm)で山を二つ作る。

山の高さについては、ボール紙の大きさを考えて、山らしく見えるように適当にしました。すると、底面の直径が約六十cm、高さは約二十八cmと、十四cmほどのちがう山が二つ出来ました。案外頑丈でおしてもつぶれることはありません。

・山に白のラシャ紙を一面にはって絵具のぬりやすいようにする。

・二つの山を縫ってつなげ、つづいた山にする。

・山の周囲に畑や野原をつくるため、保育室の机二つを合せ、そこには一面に白のラ

シャ紙をひき、その上に山をのせる。このことは準備していくうちに思いついたので、先生からも助言をいただきましたが、この方がいっそう効果があると思われました。これで山はでき上がったわけですが、山につける方法として考えたことは、なんといっても立たねばつまらないということでしたので、第一に立つこと、第二に子どもたちが好きなところへつけられることを条件として考え、ペープサートの方法でつくり、これを山にさすことにしました。ペープサートは前にしたことがあり、ちょっとやりかたを教えられると思いましたが、はさむ棒はひごにし、好きな場所にさすことができるよう千枚通を使わせて穴をあけることにしました。千枚通は危険かとも思いましたが、使う前に約束をし、よく注意していれば年長組のことですから大丈夫だと思えました。

こうして「お山づくり」の準備をしましたが、この「お山づくり」については、その

日まで誘導としては何もしてありません。

当日の準備については

・お山を用意した机を出しておく。

・絵具が使えるようにしておく。色は緑・

黄緑・茶・水色の四色。

・ひごを長さ13cm、10cm、7cm、に作って

おく。

・千枚通を三本用意する。

・画用紙を二分したものを用意する。

次に当日のようすを書いてみたいと思います。

お山の机を置き、子どもたちはこれを見て先ず何というだろう、興味を起こしてくるだろうか。誰も知らん顔していたらどうしようなどと不安な気持で登園してくる子どもたちを待っていました。ひとりふたりやってくる人はすぐ山を見つけて物珍らしそうな顔をしました。そして「先生これ何」と尋ねます。私は「お山よ」と言ってしまうくないことにし、子どもたちが何か想像するのを待っていました。興味を長く引

いておきたいとも思ったのです。「これ何かしら真白ね」などと少しことばをはさまますと「山みたいだ」、「そうだ山だよ」、富士山が高い方だ、「エベレストはもっと高いよ」などみんな山を想像し、友だち同志山を囲んで活潑に話合いがはじまりました。中に女のするなど「帽子みたい」と云った人がいて面白いものを考えたと思いました。人数も十人余りになった頃時期をのがしたら、もり上ってきた興味も消えてしまうことになりそうですので、種をあかし次の段階に進むことにしました。

「お山に行ったことあるかしら。これお山なのよ、真白なお山ではおかしいわね、みんなでいいお山つくりましようね」と話しかけると、「先生色ぬるの僕にやらせて、」とたくさんぬり手が名乗りでましたので、時をはずさず絵具の用意にかかりました。「一色をふたりでぬることにし次々と交代でましようね」と話合いました。変化は後のペープサートでつける計画ですので単

純な山にしたいと思っていました。「お山にはどんなものがあるかしら」と道や川を思い出させ、道は茶色、川は水色、畑、野原などを緑・黄緑で好きにぬっていくことにしました。子どもたちはおとなのように躊躇することなどなく、すぐにすごい早さでぬりはじめました。どんな山ができるのだろうかとしばらくは期待と心配のいり交った気持ちで傍観しているといった風でした。お山ぬりに参加した人は十五・六人だったと思います。私がことばをはさむ余地もないほどどんどんぬられていき、真白な山が池や川があつて、いたるところに道のある面白い山に変つていきました。友だちどうしの話合もおこなわれ衝突もなく進みました。

お山ぬりも終りに近づいた頃、外で自動車遊びをしていた人、保育室でおまごとしていた人などに話しかけにいきました。「お山がともきれいになったのよ。道もできていしお池や川もあるのよ。」そして見に来た人たちに前もって用意しておい

た兎と木をとりだし山にさして見せました。「お山がさみしいでしょう、皆さんでにぎやかにしましょう」と用意の紙とひごぎを持ち出しました。ただしお天気もよく遊びに夢中になっている人が多くすぐには飛びついてきてくれませんでした。さみしい山になってしまいそうだと心配しながら二、三人の人たちと作りはじめました。やり方を知っているので作り上るのも早く、山にはすぐ木などが植えられました。そのうちそれを見つけて何か自分もつきたいと思ったのか、参加者がどんどん増えてきました。いれ代りたち代り二十人ほど参加し、山は随分にごやかになりました。どんな物ができたのか書いてみますと、木・花・兎・兎の家・蛇・亀・人（山登りする人、木を切っている人、ボートに乗っている人）橋・家などで多い人は五つぐらい作り全部で四十八が山につけられました。一つ一つ異なった表情がありますので見ていて楽しいものでした。書くことよりも書いたものを山

のどこにさそうかと考え「僕の家はここだ」私の兎は「ここよ」と好きな所にさすのが楽しいようでした。橋などはささず、山と山のつなぎ目を利用してかけてあり、工夫していたようです。こんなようすで山はでき上っていきました。

時間は色をぬりはじめてから一時間ぐらい、自由遊びと併行しておこない大体の人がどこかに参加しました。

これが共同製作「お山づくり」のようすです。

この後お山のほりを今度は動きで楽しみたいと「お山歩き」のリズムをしました。

この製作について反省させられました。ことは、私が子どもたちにひっぱられてしまっていたようであったことです。子どもたちの考えを生かすにしても、もう少しことばをささみ指導的にした方がよかったのではないか。子どもたちの作ったものにして割合種類が少なく自分が作っておいた兎と木が割に多かったことを考えても何か

助言があったなら、もっといろいろな種類ができたのではなかったらどうかと思えます。適当な時に、適当な助言や励ましを言うてあげるとは難かしいが大切だと思えました。

次に書いてみるとたいへん円滑に進んだようですが決してそうではなく、多くの人が見ている手前もあって子どもたちと一よになって「お山づくり」を楽しむということよりも無事に山ができればよいようにと考えていたのではないかとことです。

また一日の保育をするために、その準備はたいへんなのだと今更ながら思いました。ただし準備ができていれば子どもたちはきつと興味をもってくれるのだと思います。子どもたちはたいへん楽しそうに、そして興味をもってこの製作をしてくれましたのでとても嬉しくやり、甲斐のあった日でした。多くのことを経験し、いろいろなことを学んでいきたいと思えます。